



絶景が見  
える寝床

川崎ゆきお

つづら折れの道と言うのだろうか。七曲がりの坂と 言ってもいい。山道で車は入れない。階段が所々ある。丸太を横に置き、杭で留めた程度なので、かなりはずれている。誰も通らない道なのだ。山の取っつき に、こぶのように出ている場所に一軒の家がある。この家専門の通路だ。資材をよくここまで運び上げて建てたものだ。

五階建てほどのビルの階段を上る体力がいる。その屋敷の主は足腰が強いわけではない。ここに来たときはしばらくは外出しないためだ。当然、それなりの資産を持っており、運転手が送り迎えしていた。小柄な老人のため、おぶればいい。そのため、運転手は体格のしっかりした男が採用されている。

この屋敷の目的は簡単なものだ。マンションでも可能だが山並みや森、庭の柿木。などが見える必要があった。それに隣近所はいない方がいい。

山も幾重にも重なって見える方が好ましい。できれば遠くに雪を被ったような高い山があることも。

さて目的だが、寝たきりになったときの楽しみらしい。布団の上からそれらの風景が一望できる。

そして、まだ足腰は確かだが、田端老人は今日も風景を見ている。布団の上からではなく、その横のソファからだ。こちらの方が多少視点が高くなる。縁側 の向こうは庭と絶壁で、大キャンパスの風景画を見ているようなものだ。絵や映画と違い、動く。

「柿の葉を数えたよ」

「何枚ありました」

「隠れているのがあるので、正確ではないが、柿が青い頃に比べ、減っているような気がする。最後は全部落ち、柿だけが残るんだろうねえ」

「オーヘンリーの最後の一葉のようですねえ」

「よく知ってるねえ」

「いえいえ」

「これからが紅葉の始まりでねえ。変化が見られる。毎日ね。空の雲も小さくなってる。あれは鱗雲かね。たまに飛行機雲が出る。あれはジェット戦闘機だねえ。練習しているのかねえ、毎日同じ時間に飛んでる」

「はい」

「あの取っつきの山の右側に蜜柑の木があるんだ。誰が植えたんだろう。蜜柑の産地とは聞いていない。誰かがあそこで蜜柑でも食べたのかねえ。その種が」

「はい」

「その蜜柑が実っておる。葉も見も青いのでなかなか気付かなかった」

「蜜柑の花は咲いてましたか」

「それは残念ながら見ていなかった。最近だよ。蜜柑の木を発見したのは。それにこの距離からでは花なんて分からないかもしれない。知っていれば、見えたかもしれないがね」

「それで、いつまでご滞在で」

「そうだねえ、ほとぼりが冷めるまでだ」

「もう半年ですよ」

「そうだね、世間も忘れていた頃だ。そろそろ戻ってもいいか。人の噂も七十五日というが、過ぎたからね」

「一応収束しています」

「いや、まだ出るのはまずい。緊急入院で、その後、静養中で、かなり弱っており、復帰は難しいイメージを作らないとね」

「はい」

「しかし、こういうのを久し振りに見ていると、いいねえ」

「えっ、何でございますか」

「だから、ここからの展望だよ。気に入ってしまったよ」

「戻られると、かなり多忙になるかと」

「そうだねえ。面倒なことがまだまだ残っていたねえ。いっそ」

「いっそ」

「このまま、ここで暮らすか」

「それはなりません。後の処理が山積みですから」

「その山より、この山の方がいい」

「今週一杯までにして欲しいとのことですよ」

「分かった」

「じゃ、これで連絡は終わります」

老人はそのまま山を見ている

「次は柿の数を数えるか」

「はい」

了